

神の計画はこうして成し遂げられた 22

列王記下 5：1－19

預言者エリヤとエリシャ

副牧師 松坂 政広

導入

主なる神が、ご自身の民と言われる「イスラエル民族」を率いたのは、最初は創世記に出てくる族長と呼ばれるアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフを通してでした。それが、モーセの段になるとその名の通り、解放者（奴隷の状態からの、そして解放された生き方を示す）指導者を通してとなり、ヨシュアがそれを継承し、そしてその後、主がさばき司と呼ばれる士師を起し、最後の士師サムエルが、民のリクエストを主なる神との間でとりなす祭司、預言者として仕えました。預言者の存在は、イスラエル民族が王の存在を求めるようになって本格化します。預言者を通して主は、イスラエルの王を導いていけます。

主なる神が、イスラエル民族を導かれた物語は、その継承の歴史としても辿ることができるかと思いますが、アブラハムからイサクへ、イサクからヤコブへ、ヤコブからヨセフへ。いずれも主が幾重にも介在されて、その継承自体が物語といった感じでしょうか。わたしの家族学の研究テーマは、親の養育態度の連鎖で、4つの仮説を立てているわけですが、ひとつは、親からしてもらって良かったことは、子どもにもするだろう。ふたつめは、親からしてもらって良かったことでも、子どもにしないこともあるだろう。みつめは、親からされて嫌だったことは、さすがに子どもにはしないだろう。そしてよつめは、親からされて嫌だったことを、なぜか子どもにしてしまうこともあるだろう。父アブラハムが息子イサクをささげた物語と、父となったイサクがふたりの息子に向き合う物語がどうつながるのか、今でもよくわからない感じがすけれども、父イサクには愛されなかったヤコブが、ヨセフを偏愛したことも、信仰の継承がドラマのような展開を見せることにつながっていくわけですが、/サウル王からダビデ王へ、ダビデ王からソロモン王への継承も、波乱万丈でした。

本論1 エリヤ バアルの預言者との対決（真の神を示す/知る）

ソロモンは晩年、数多くいた王妃の影響で、自分の心をほかの神々の方へ向けました。彼の心は、イスラエルの神、主から移り変わりました。このことで主は、ソロモンは、わたしの道を歩まなかった（列王記上 11：33）、と言われました。その結果、120年続いた王国は、ソロモン以後、二つに引き裂かれます。ソロモンの子レハベアムが南ユダ王国を、元王の家来で王に反逆したヤロベアムが北イスラエル王国を治めることとなります。

ソロモンの後継者、その子レハベアムは、南ユダ王国で父以上に重い税と労働を民に課し、そのことで王国が南北に分断した、と言うこともできますね。一方のヤロベアムは、北イスラエルで金の子牛を作り、ベテルとダンに安置し、偶像礼拝の道から立ち返ることをせず、地の面から根絶やしにされることとなります(列I 13:34)。それが、紀元前721年のアッシリア帝国による北イスラエル王国の滅亡でした。

そんな時代に、主は、預言者、本格的な預言者をお立てになりました。預言者エリヤの登場です。預言者ですから、神さまがお語りになることを語ります。神さまは、真摯なお方で、必ず前もって神の出来事をお語りになります。当時すでに存在していた預言者学校では、主の預言者となるよう導かれた人たちがその学びと訓練にあっていたようですね。「それで、彼は行って、主のことばのとおりにした。」と、まずは、エリヤは、身をもってそのことの証人となる訓練を受けました。そして、いよいよバアルの預言者との対決の時を迎えます。主のことばが真実であることを証する預言者の祈りは、あわせて、民をとりなすものでもありました。神の出来事の目撃者となった民は、「主こそ、神です。」と言い表しました。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになってください(列I 18:37)。これが、預言者エリヤの祈りでした。バアルの神、聖書の神、いずれが真に生きておられ、祈りに応えられる神かが明らかとされた、カルメル山での対決は、実は、信仰に迷いやすいイスラエルの民に、信仰の決断を迫るものでした。

自分に都合の悪い内容を突き付けられた王たちは、不機嫌になり、激しく怒るわけですね。さらには、イスラエルの民に至っても、主の契約を捨てて、主の祭壇を壊して、預言者たちを剣で殺して、エリヤの命も取ろうと狙っているわけですから、エリヤもさすがに力尽きそうになるわけですね。けれども再三、主なる神にことばをかけていただいて、カづけられ、立ち上がるわけです。力強くバアルの預言者たちと闘うシーンよりも、弱音を吐いて、主に叱咤激励されるプロセスの方が、エリヤに親近感を覚えるのは、わたしだけではないんだろうと思います。列王記上19章以降がそれに当たります。それでも、徒労に終わるだけの働きではもちろんなくて、バアルに支配された王でさえ、主はこう仰せられると取り次いだ預言者エリヤのことばを通して、へりくだらされるということが起きるわけですね！それは、イスラエルの本来の王の姿でもありました。他の国の王とは違って、イスラエルでは、本来、神が王であられて、王といえども、国民の側にいる存在という視点がそこにはあったはずだからです。

本論2 エリシャ . . . (真の神がなされることを証しする)

預言者エリシャも、主はこう仰せられる！と取り次いで、主のことばが真実で、重みのあるものであることを証しました。「だから知れ。主がアハブの家について告げられた主のことばは一つも地に落ちないことを(10:10)。」アハブの家とは、北イスラエルの王家を指します。列王記下は、主に従わない王が目まぐるしく交代し、しかも血なまぐさい話の連続で、ここから何を糧として得られるだろうかと思ってしまう感じですが、そんな中、告げられた主のことばが一つも地に落ちないことは、確認の余地があります

ね。北イスラエル唯一の名君とも称せられるエフーは、エリシャを通して語りかけられた主のことば通り、バアルをイスラエルから根絶やしにしました。

預言者エリシャがあわれみ深い神がなさることを証した象徴的な出来事に、ナアマンの癒しがあります。ナアマンというアラムの国（今のシリア）の将軍、勇士が、重い皮膚病にかかっていた。直してもらいたいと思って、君主の後押しを受けて、隣国北イスラエルの預言者エリシャを訪ねてきました。ところが、そこで言われたことに納得できなかったナアマンは、怒って帰途に着こうとした際、彼の周りにいた人たちの助言に耳を傾けた彼は、言われたとおりにすると、病が直ったというのです。「そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった（5：14）んですね。

アラムは、ガリラヤ湖の北東に位置する国で、イスラエルにとっては、脅威でした。ナアマンの妻が召使としていたイスラエルから捕虜として連れてきていた少女の話を聴いて、それを夫ナアマンに伝えて、ナアマンがそれを王に伝えたところ、事が動き出したわけですね。そしてエリシャを通して癒し主との出会いに導かれます。不治の病を患っていたナアマンに、あわれみ深い神さまが会ってくださいました。これまでに幾たびか両国の間で戦争を経験してきたことから、イスラエルの王は、再びアラムと戦火を交えることに恐怖を感じたというのです。そこでエリシャが、リクエスト通り、ナアマンの相手をするようになります。ナアマンが、治りたい、直してほしい、と思っていたことは、用意したお礼の額からも、11節の彼の期待のことばからも窺い知れますね。家来にいさめられ、なだめられさえして、神の人のことば通りにすると、期待を超えて、神の出来事を経験することになります。これまで、イスラエルを苦しめてきたわたしを、イスラエルの神さまが、いやして下さった！このわたしをと。ナアマンのからだ癒しを必要としていたように、彼の霊も神との出会いを必要としていました。そんな彼が、神さまを信頼するよう導かれたのでした！ナアマンは、旧約聖書を貫いている、わたしの外に神はいない。という主旨のことを言い表わしました！これに対して、エリシャは、わたしの仕えている主は、生きておられる。と返答します。主に癒していただくという神の出来事を経験したナアマンは、まことの神を礼拝するための祭壇を築くことと、彼が仕えている主君のための任務を果たすことに関して、許しを請うた際に、エリシャは、神がナアマンに恵みを注いでくださるように、と祈ったというのです。

結び

預言者を通して主なる神がなさろうとしたことを、エリヤからエリシャへの継承に見ると、それは、民の心を真実の神に立ち返らせることでした。わたしたちが聞き覚えのある「カーナビ」のナビ、ナビゲーションには、大事な意味がふたつあって、舵を取る + 克服する、という意味ですね。何の目印もない大海原で、海で舵を取るのは大変なことですよ。きっと。目的地に辿り着くまでに、克服しなければならないことが少なからずあるでしょうね。そこで、必要なのが、ナビゲーションということになります。これは、旧約聖書の預言者から、ナービーから来ていますね。預言者を通して、主がわたしたちの旅路の舵

取りを導き、困難を克服するよう導いてくださるのですね。紀元前9世紀の中頃に現れた預言者エリヤは、その先駆者でした。そして、エリヤ（主こそ神）からバトンを受け継いだエリシャ（神は救い）も、この一事を貫きました。

主こそ神という名のエリヤが、神は救いという名のエリシャにバトンを引き継ぐよう、神は導かれました。バプテスマのヨハネと重ね合わされるエリヤから、サムエルと重ね合わされるエリシャに主の働きが受け継がれました。バトンが引き継がれる際の光景で興味深いことは、エリヤがエリシャの言い分を譲歩して受け入れる一方で、また、エリシャの言い分を神に委ねるよう導かれたことが記されています。前者は、主がエリヤをその人生の最期にベテルに、エリコに、そしてヨルダンに遣わそうとされた際に、「あなたは、ここに留まっていなさい。」と言われると、「確かにわたしは、あなたを離れません。」と生きておられる主とこのお方に導かれている指導者であるエリヤから離れない！と断言しますと、共にくだって行くことになるわけですけれども。後者は、「わたしにあなたの霊の2倍の分け前があるように、神さまにお願いしておいてください！」とエリシャは願い出ました。それくらいのずーずーしさがあっていいんですよね。「何なりと願い出なさい。」とエリヤに促されて、ということでしたから。その願いは聞き届けられ、預言者仲間がその証人となるんですよ。「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている。」と。

後継者エリシャは、生きておられる主と指導者に導かれて、18のエピソードを遺しました。今朝のナアマンの癒しはそのひとつですね。あなたも、生きておられる主とあなたの師に導かれて、どんなエピソードを遺していけますか？